

## 精神科第一病棟 この一年

神経精神科第一病棟看護科長 濱 田 譲

平成13年度の病棟目標は「患者に信頼され、その人に合った生活の援助を行う」とした。

精神障害者の多くは、その疾病の性格上、生活の破綻を招く事が多く、当たり前の生活が出来なくなってしまう。よって「生活への援助」に焦点を当てて支援し、自立を促し「患者が自分らしく社会生活が出来る」ようにサポートすることが最も重要なことである。

ここで大事な事は、日々の看護活動、支援の内容等を正確に過不足なく継続する事であり、その基本となるのが看護過程である。看護過程の充実と患者へのケアについて、毎日申し送り後、リーダーを中心としてショートカンファレンスを行い、メンバーへのケア内容の確認と変更を行っている。

4月の異動で井村 要医師が小樽の方へ、吉田拓医師が札幌医大へ転勤された。長い間、道北の精神医療にご尽力頂きまして感謝申し上げますと共に、新天地でのご活躍をお祈り致します。新しく山本健司医師と原田研一医師が札幌より赴任されました。看護部からは昨年に引き続き2名の新人看護婦が配属となりました。新卒で精神科勤務について色々ご意見があるようですが、しっかりと精神看護を経験することは、決してマイナスにはならないと思います。新鮮な気持ちで精神科看護の大事さ、素晴らしさ、楽しさ、又精神科看護の醍醐味を学んでほしいと思いますし、それをしっかりと教えるのが、先輩看護者の責務であると思います。

4月より外来診療体制の変更に伴い、「病棟医」を配置し病棟内の細々とした事については、病棟医が行う事となり徐々にではあるが業務がスムーズになって来た。また、病棟運営会議の開催を医長より提案があり、鎌田医長、両看護長、両主任と、時に作業療法士の出席をもって定例で開催する事となり、2001年度の病棟運営方針が医長より示された。基本方針は、全ての職員が治療に関与しているという責任と自覚を持ち、又入院患者さんに対し、「ゆとり」をもって接し、誠実かつ人道的な医療サービスを提供する事である。運営会議には、医師側、看護側からの問題提起を含め、

様々な情報交換や入退院患者の動向等、協議・報告が行われています。

平成13年の入院患者数は、138名（前年135名）で月平均11.5名。第二病棟からの転入は38名（同45名）、他施設からは5名であった。入院患者の主な疾患は、抑鬱状態が44.2%と約半数を占め、次いで精神分裂病の22.4%であった。開放病棟に入院してくる抑鬱状態の患者は休息を目的とした患者が多いが、病棟の構造上、個室が少なく、又閉鎖病棟との関係で、抑鬱状態の患者がゆっくりと休息出来る環境にはなく、一刻も早い精神科病棟の改築を望みたい。退院患者数は、138名（同137名）で月平均11.5名、第二病棟への転出は20名（同22名）、他施設へは14名、死亡は5名であった。

今年の当科における年間の行事は、患者の高齢化や身体合併症患者のため参加者数は前年と比較して大きな変化はない。

在院期間についても前年と比較しても大きな変化はみられず、1年以上の長期入院患者は74.6%（前年72.8%）と多く、10年以上の長期入院患者は約半数近くになる。入院患者の年齢構成についても、ほぼ前年と変化はなく、65歳以上が約4割を占め、高齢化による諸問題としてADLの低下や身体合併症、患者の痴呆化等によって介護に対するマンパワーがとられ、本来の精神科開放病棟としての役割が手薄になっている事は否めない。何をするにもマンパワー不足の状態であるが、業務改善をしながら今年取り組みの中では、第一病棟としての看護実践能力向上について自己目標を個々設定してもらい、その自己目標に向かって1年間努力し自己評価する事とした。さらに、学生指導に対する臨床指導者不足から新たに4名を加え、経験者と共に1年間経験を積んでもらい、後継者の育成に努めた。

精神科医療のニーズが益々高まる今、この地域における精神科医療を担う施設として、今後どのような体制作りをしていくのか、長期的視野に立って考えていかなければならない。